

天正大地震

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

天正大地震(てんしょうおおじしん)は、天正13年11月29日(1586年1月18日)に日本の中部で発生した巨大地震である。

『東寺執行日記』、『多聞院日記』など多くの古文書に記録が見られ、『梵舜日記』(別名『舜旧記』『舜舊記』)には約12日間わたる余震が記録されている^[2]。

目次

- 1 概要
 - 1.1 震源域
 - 1.2 被害
- 2 津波
 - 2.1 伊勢湾
 - 2.2 若狭湾
 - 2.3 三陸沿岸
- 3 噴火
- 4 地震後
- 5 関連項目
- 6 脚注

概要

この地震は天正地震、白山地震とも呼ばれる。被害地域の記録が日本海の若狭湾から太平洋の三河湾に及ぶ歴史上例のない超巨大地震であるため、震源域もマグネチュードもはっきりしていない。

当時、三河にいた松平家忠の日記によると、地震は亥刻(22時頃)に発生し翌日の丑刻(2時頃)にも大規模な余震が発生。その後も余震は続き、翌月23日まで一日を除いて地震があったことが記載されている。

震源域

近畿から東海、北陸にかけての広い範囲、現在の福井県、石川県、愛知県、岐阜県、富山県、滋賀県、京都府、奈良県(越中、加賀、越前、飛騨、美濃、尾張、近江、若狭、山越、大和)に相当する地域にまたがって甚大な被害を及ぼしたと伝えられる。また阿波でも地割れの被害が生じており、被害の範囲は1891年の濃尾地震(M8.0–8.4)をも上回る広大なものであった。そのことなどからこの地震は複数の断層がほぼ同時に動いたものと推定されている^[2]。

震央は飛騨の白山断層とする説、伊勢湾とする説、2つの地震が連動したとする説などがあり^[4]、一方では現在の岐阜県の阿寺断層とする説もある^[5]。1998年に行われた地質調査では養老断層^{[6][7]}における2つの活動歴が確認され、最新の活動は14世紀であることからこの断層が震源断層のひとつであった可能性が高くなった^[8]。

これらの説では太平洋側と日本海側の若狭湾の両方に津波被害が及び、内陸部の被害も大きいことを説明できていない。日本海側沿岸と太平洋沿岸の両方に及ぶ大津波は他に知られていないため^{[9][10]} ^{[11][12]}。フロイスによる若狭湾の津波記録^[13]は琵琶湖沿岸の地滑りによるものとの誤りだと考えられているが、若狭湾の津波については別の資料もある(後述)ため、宇佐見は若狭湾の地震としている。

被害

琵琶湖では、下坂浜千軒遺跡(しもさかはませんけんいせき)となる現長浜市の集落が液化化現象により、水没した^[14]。秀吉の築いた近江長浜城を山内一豊(妻は長性院)が居城としていたが全壊し、一人娘と祢(よね)姫(数え年6歳)と乳母が圧死した(『一豊公記』)。また家老の乾和信夫妻も死亡した^[15]。

越中国では木舟城(現在の高岡市の南西)が地震で倒壊、城主前田秀継夫妻など多数が死亡した。前田秀継は前田利春の子で前田利家の弟である。

飛騨国帰雲城は帰雲山の山崩れによって埋没^[16]、城主内ヶ島氏理とその一族は全員死亡し、内ヶ島氏は滅亡した。また、周辺の集落数百戸も同時に埋没の被害に遭い、多くの犠牲者を出すこととなった。白川郷では300戸が倒壊するか飲み込まれた。

郡上八幡では、奥明方(現郡上市明宝)の水沢上の金山、また集落(当時6、70軒)が一瞬で、崩壊し、辺り一面の大池となったといわれる。

美濃では大垣城が全壊焼失した^[1]。

京都では東寺の講堂、灌頂院が破損、三十三間堂では仏像600体が倒れた^[17]。

尾張では昭和63年(1988年)度に実施された五条川河川改修に伴う清洲城下の発掘調査で、天正大地震による可能性の高い液化化の痕跡が発見されている。天正14年(1586年)に織田信雄によって行われた清洲城の大改修は、この地震が契機だった可能性が高いと考察された^[18]。

「顕如上人員塚御座所日記」に、「十一月二十九日夜4ツ半時、大地震あり」との記述がある。株岳付近で地震による(?)山崩れ。家屋300余埋没^[19]。

若狭湾、伊勢湾での大きな津波被害もあった(後述)。

津波

伊勢湾

伊勢湾に津波があつたとされる。加路戸、騎江、篠橋、森島、符丁田、中島などは地盤沈下したところに津波が襲来し水没した。普通は泥海と化した。伊勢湾岸では地震とともに海水があふれ、溺死者を出した^{[20][21]}。

若狭湾

『兼見御記』には丹後、若狭、越前など若狭湾周辺に津波があり、家が流され多くの死者を出したことが記され、『フロイス日本史』にも若狭湾と思われる場所が山ほどの津波に襲われた記録があり、日本海に震源域が伸びていた可能性もある^[22]。他にクラッセ『日本教会史』(1689年。明治時代に翻訳されて『日本西教史』)や『豊鑛』(竹中半兵衛の子の竹中重門著、江戸時代。豊臣秀吉の一代記)、『舜舊記』、『顕如上人員塚御座所日記』、『イエズス会日本書翰集』などにも、詳しい記述がある^{[23][24]}。

2011年12月に原子力安全保安院は、敦賀原発の安全性審査のための津波堆積物と文献調査報告^{[25][26]}を発表した。それによると「仮に天正地震による津波があつたとしても、久々子湖に海水が流入した程度の小規模な津波であつたものと考えられる。なお、事業者においては念のための調査を今後とも行っていくことが望ましいと考えられる。」としている^[27]。

フロイス『日本史』(5、第60章、第2部77章)

ちようど船が両側に揺れるように震動し、四日四晩休みなく継続した。その後40日間一日とて震動を伴わぬ日とはなく、身の毛もたつような恐ろしい轟音が地底から発していた。若狭の国には、海に沿ってやはり長浜と称する別の大きい町があった。福れ動いた後、海が荒れ立ち、高い山にも似た大波が遠くから恐るべきうなりを発しながら猛烈な勢いで押し寄せてその町に襲いかかり、ほとんど痕跡を留めないまでに破壊してしまった。

(高)潮が引き返すときには、大量の家屋と男女の人々を連れ去り、その地は塩水の泡だらけとなって、いつさいのものが海に呑み込まれてしまった。

「やはり長浜と称する別の大きい町」というのは、前の文章に「長浜城下で大地が割れた」と書いてあり、区別するためである。そこには「關白殿が信長に仕えていた頃に居住していた長浜と云うところ」という説明もあり、これは1574年(天正2年)に秀吉が築城を開始した琵琶湖東岸の長浜市にある長浜城を指し、若狭湾の長浜との区別をはっきりさせている。

吉田兼見『兼見卿記』^[28]

廿九日地震二王生之堂壊之、所々在家云々(ア)リ塚数多死云々、丹後・若州・越州浦辺波ヲ打上在家悉押流、人死事数不知云々、江州・勢州以外人死云々

丹後・若州(若狭)・越州(越前)沿岸を津波が襲い、家々はすべて押し流され、死者は無数であった。^[29]

『舜旧記』(十一月二十九日条)

近国之浦兵々屋、皆波二益レテ、数多人死也、其後日々二動コト、十二日間々也

クラッセ『日本教会史』(1689年)^[30]

若狭の国内貿易の為に屋々(しばしば)交通する海境に小市街あり、此処は数日の間烈しく震動し、之に繼ぐに海嘯(かいしよう、津波)を以てし、激浪の為に地上の家は皆な一掃して海中に流入し、恰も(あたかも)元来無人の境の如く全市を乾淨したり

これには津波が若狭湾を襲ったのは、旧暦11月29日ではなく、その後の運動地震(または誘発地震)による津波であったとしている^[31]。

『イエズス会日本書翰集』

若狭の国には海の近くに大変大きな別の町があって町全体が恐ろしいことに山と思われれるほど大きな波浪に覆われてしまった。そして、その引き際に家屋も男女もさらさらってしまって、塩水の泡に覆われた土地以外には何も残らず、全員が海中で溺死した。

『日本ノ大地震ニ就キテ』 理學博士大森房吉 震災予防調査會報告 32号 p57-58

天正十三年十一月二十九日(西暦千五百八十六年一月十八日)山城、大和、河内、和泉、播磨、讃岐、淡路、伊賀、伊勢、尾張、三河、美濃、遠江、飛騨、越前、若狭、加賀大地震(沿海二津浪アリ)

三陸沿岸

宮城県本吉郡戸倉村(現在の南三陸町戸倉)口碑に、「天正13年11月29日畿内、東海、東山、北陸大地震の後に津波来襲」という記述があり、太平洋北部にも津波が来襲したが、運動地震による津波があった疑いがある^{[32][33]}。

噴火

『四ツ半時、大地震あり。この時、硫黄山(姥岳)大噴火を起し、麓中尾村は地形を大きく変貌する。』(頼如上人員塚御座所日記)。姥岳が噴火したという口碑がある^{[34][35]}。

地震後

1586年の天正大地震後、近い時期に大地震が複数起こっており、それらの引き金を引いた可能性がある。

- 1596年9月1日(文禄5年閏7月9日) 慶長伊予地震(慶長伊予国地震) - M 7.0。
- 1596年9月4日(文禄5年閏7月12日) 慶長豊後地震(大分地震) - M 7.0~7.8。
- 1596年9月5日(文禄5年閏7月13日) 慶長伏見地震(慶長伏見大地震) - M 7.0~7.1。
- 1605年2月3日(慶長9年12月16日) 慶長地震(東海・東南海・南海連動型地震) - M7.9~8。
- 1611年12月2日(慶長16年10月28日) 慶長三陸地震 - M 8.1。
- 1614年11月26日(慶長19年10月25日) 高田領大地震 - M 7.7・・同じ日に日本海側の越後高田領と太平洋側の伊豆、銚子の両方の津波記録がある他、京、金津、伊豆、紀伊、山城、松山の地震被害記録があるきわめて特異な地震(1586年天正大地震と同様)。

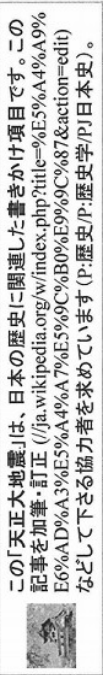
秀吉が伏見城を築くときに1592年(文禄元年)京都所司代に送った書簡に、「ふしみのふしん、なまつ大華にて候ままと記されていた。なまず大事」=城の建築にあたっては地震対策を万全にせよ、という意味であるが、これは1586年の天正地震を念頭に置いたものとみられている^{[36][37]}。

関連項目

- 沸雲城
- 功名が辻
- 連動型地震
- 地震の年表 (日本)

脚注

1. ↑ 寒川旭『地震の日本史』中公新書、2007年
2. ↑ 震災予防調査会編『大日本地震史料』上巻、丸善、1904年
3. ↑ 中村一明、守屋以智雄、松田時彦『地震と火山の国』岩波書店、1987年
4. ↑ 国立天文台『理科年表』丸善
5. ↑ 岐阜・阿寺断層帯で地震発生 岐阜県生種津上界 東日本大震災の影響で (http://sankei.jp/mnsn.com/science/news/110910/scn110910066530000-n1.htm) 産経新聞 2011年9月10日閲覧
6. ↑ 桑名市から養老町に南北に20km伸びる。養老一桑名一四日市断層帯の一部
7. ↑ 地震調査研究推進本部・養老一桑名一四日市断層帯 (http://www.jishin.go.jp/main/yosokuchizu/katsudanso/f067_yoro_kuwana_yokkaichi.htm)
8. ↑ 養老断層の完新世活動履歴 -1586年天正地震・745年天平地震震源断層の地質学的証拠 (http://cais.gsi.go.jp/YOCHIREN/report/kaihous6/06-06.pdf) 地震予知連絡会』会報第63巻 (PDF)
9. ↑ いかなる既知の場所 (中央構造線、プレート、トラフ、フラグメント、断層、分岐断層、回折断層、回折帯など)とその運動)にもあてはまらない(巨大地震ならば痕跡が残っていると考えられている)のも、運動誌を否定する理由となっている。推定Mwは9近いと推定されるが、内陸部でM9クラスという地震も世界的に未発見である(近いものはM8の2運動地震である1811年の米國中部ニューマッド地震くらい)。
10. ↑ 琵琶湖がかって伊賀地方にあって北上し現在の位置にあることと、琵琶湖西岸断層帯という大きな断層が存在することから考えられるプレート構造から言えば、断層が伊賀湾の地震より遠くまで伸びているという考え方もある。これを太平洋岸までのはずのそれは難しいが、伊勢湾の地震との運動地震と考えれば説明がつく。
11. ↑ 常神半島東側中部にあってあった養老(くろみ浦)(現美浜町)が津波に運われて消滅したのが天正地震以前の1683-84年らしいことを外岡慎一郎教員短期大教授が突き止めた。津波が一つあったのか二つ以上あったかの謎は深まっている。
12. ↑ 『若狭湾津波の伝承を分析 教員短期大・外岡教授』中日新聞2012年4月24日 (http://www.chunichi.co.jp/article/fukui/20120424/CK2012042402000021.html)
13. ↑ フロイスは「目撃者たちが後日司祭たちに語った」としている。
14. ↑ 朝日新聞2010年6月5日
15. ↑ 見性院は無事であった。
16. ↑ 未だに城のあった正確な場所は不明である。
17. ↑ 宇津徳治、嶋悦三、吉井敏樹、山科健一郎『地震の事典』朝倉書店、2001年
18. ↑ 森岡一録木正貞 (1989年3月24日). "愛知県清洲城下町遺跡における地震痕の発見とその意義" (PDF). *活断層研究* **7**: 63 - p.69. 1989. 2011年9月12日閲覧。
19. ↑ 国土交通省 神通川水系砂防事務所 (http://www.hrr.mlit.go.jp/jinsu/jigyos/saigai/yakiatake.html)
20. ↑ 東京大学地震研究所『日本地震史料 続補遺』日本電気協会、1995年
21. ↑ 『長島町史』1978年
22. ↑ 『兼見卿記』大日本史料』第11編23冊
23. ↑ 「天正地震」と越前・若狭・外岡慎一郎: 教員短期大学研究紀要』第26号:2012年3月1日 (http://crf.flib.u-tokui.ac.jp/ospaace/bitstream/10461/8970/1/?ac5%a4%90%ce5%b2%a1%ce3%80%88%ce5%a6%a0%e6%9%ad%7%ce5%96%cb%6b%ce5%9c%87%ce3%80%8d%81%ce5%8e%88%ce5%89%ce3%83%bb%e8%81%ce7%89%ad.pdf) (http://hdl.handle.net/10461/8970)はアクセス不可)この論文には「クビ浦」についての発見が掲載。
24. ↑ 『罪作りなフロイス』鎌田道史:読売新聞2012年3月28日朝刊16面
25. ↑ 有効な文献を『兼見卿記』とフロイス『日本史』(と同様のキリスト教の報告)だけとした。県市町村史や神社の調査も事業者によって行われているものを引用。
26. ↑ 若狭湾沿岸における天正地震による津波堆積物調査について 平成23年12月27日 原子力安全・保安院 (http://www.nisa.meti.go.jp/shingikai/800/26/008/8-2.pdf)
27. ↑ 『若狭湾の津波調査 精度高め多角的検証せよ』福井新聞の論説(2012年2月2日午前8時18分) (http://www.fukushimbun.co.jp/localnews/editorial/32848.html)
28. ↑ 宇佐美龍夫『日本の歴史地震史料 拾遺 三』東京大学地震研究所編、1995年
29. ↑ 時刻を「子の刻」(午前0時ころ)とする報道があり、天正大地震の本震と若干異なるが、該当ページにはない。
30. ↑ 『罪作りなフロイス』鎌田道史:読売新聞2012年3月28日朝刊16面
31. ↑ 若狭で前兆となる地震が数日間あり、本震や津波はその後に来たとも読める。南海トラフの巨大地震でも、170所だけ前兆があったという例がある。
32. ↑ 天正13年5月14日にも三陸沿岸に津波が来襲したという。
33. ↑ 吉村昭『三陸海岸大津波』文春文庫版p60(2)
34. ↑ 国土交通省 神通川水系砂防事務所 (http://www.hrr.mlit.go.jp/jinsu/jigyos/saigai/yakiatake.html)
35. ↑ 韓国国際火山砂防センター (http://www.qsr.mlit.go.jp/osumi/stvsc/home/03kazanto/03-4jp/kazan-j-32.htm)



この「天正大地震」は、日本の歴史に関連した書きかけ項目です。この記事を加筆・訂正 (//ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E5%4A%A9%E6%AD%A3%E5%44%A7%E5%9C%B0%E9%9C%87&action=edit) などして下さる協力者を求めています (P:歴史/P:歴史学/P:日本史)。

「http://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=天正大地震&oldid=42825398」から取得
カテゴリー: 日本の地震 | 安土桃山時代の事件 | 16世紀の地震 | 1586年 | 運動型地震

- 最終更新 2012年6月7日 (木) 05:29 (日時は個人設定で未設定ならばUTC)。
- テキストはクリエイティブ・コモンズ 表示-継承ライセンスの下で利用可能です。追加の条件が適用される場合があります。詳細は利用規約を参照してください。